

中央政界は今夏、人事の季節を迎えた。自民党総裁として参院選に勝利した安倍晋三首相は八月上旬、党人事と内閣改造を行った。民進党は九月に代表選を控える。

人事の成否は組織の行方を左右する。トップの人事はなおさら影響が大きい。思いつくのは住友銀行副頭取から、業績が低迷していたアサヒビール社長に就任した樋口広太郎氏の逸話だ。樋口氏は同業他社の幹部や同社の社員らに不振の理由を聞いて回った。商品の鮮度の問題があると見るや、売れ残っていた古いビールを大胆に回収・廃棄した。会社のロゴマークを変えてイメージを一新し、「スーパードライ」のヒットで、同社を業界首位に復活させた。人事は組織を活性化させるのが目的だが、失敗すると混乱を招いたり、メンバーの士気を低下させたりもする。リーダーにとっては重たい仕事の一つ。二〇〇三年まで北海道知事を二期務めた堀達也氏はこう振り返っている。

「人事はあまり好きじゃなかったなあ。最終的の人事権は僕にあるわけだけど、たいてい顔を知っているから、こいつを昇格させると、あいつとあいつが腐るかなとか気になってね」（北海道知事という仕事）

高橋はるみ知事は、自身に従順な部下を重用する傾向があるのだとか。自分と異なる

## 組織活性化の淵源

る意見を直言する部下を排除すれば、上司に都合の悪い情報を上げない組織となる。状況認識が正確にできないと、住民ニーズとずれた行政運営になりかねない。道政史上最長の四期目の政権下で、道庁がそんな陥穽にはまっていないか点検が必要だ。

安倍首相の今回の人事で、注目されるのは二階俊博前総務会長の幹事長への起用だ。自転車事故に遭った谷垣禎一前幹事長を続投させられなかったための次善の策だが、結果的には絶妙な人事になったとも言える。

二階氏は衆院和歌山三区選出の当選一回、七七歳のベテラン。一九九三年の自民党分裂の際に小沢一郎氏（現生活の党共同代表）と行動を共にし、自民党を離党。新生党、新進党、自由党に加わった。自公連立政権からの離脱を決めた自由党党首の小沢氏と袂を分かつて連立政権にとどまり、その後、自民党に復党した。

「出戻り組」が冷遇される自民党内で、復党後の二階氏は、経済産業相や党国対委員長など要職を歴任した。時の首相に忠実に仕え、党内だけでなく公明党などとの調整力もある政治手腕を買われたためだ。

安倍首相は、ポスト安倍をうかがうライバルに党の実権を握らせず、首相の意を体して党内にらみを利かせる役割を期待して二階氏を選んだのだらう。二階氏が選挙

事情に通じているため衆院解散・総選挙を視野に入れていても受け取れるし、中国の要人との独自のパイプは緊張をはらむ日中関係で同氏にバランス役を期待していると言える。首相のさまざまな狙いが垣間見える。

首相は第一次政権の退陣後、自らの失敗を振り返った「反省ノート」に「人事において情に流されてはいけない」と書き記したという。気心の知れた仲間を集めた「お友達内閣」が破綻した経験から学び、「誰を使えば組織が機能するか」という冷静な計算があったのだらう。

民進党の岡田克也代表の後任を決める代表選は九月二日告示、十五日投票と迫ってきた。現時点では連舫代表代行が本命視されている。岡田民進党は参院選での野党共闘路線で一定の成果を上げたが、今後、この路線の継続について党内で議論を呼ぶだろう。

旧民主党は与党時代、組織をまとめるよりも、党内で議論を戦わせることにエネルギーを消費させていた。今回の代表選が「安倍一強」に対抗するための強力な組織を築きつけにできるか。民進党の人事は目立たぬテーマだが、今後の日本政治にとって重要なポイントになると思う。

ハ聖V